ローマ再生とエジディオ・ダ・ヴィテルボ　　根占献一(学習院女子大学)

ユダヤのカバラ思想とイタリア・ルネサンスの哲学者ピーコとの関係を扱った専門書『G・ピーコ・デッラ・ミランドラ―宗教的・哲学的シンクレティズム　1463 - 1494』(バーリ　1937 年)で知られるエウジェニオ・アナニーネは、この出版の 20 年後、第二次世界大戦後に、『中世(5 世から 10 世紀)を通じた再生(リナシタ)の概念』(ミラノ / ナポリ　1958 年)を公刊した。前者はその内容からして二人の専門家、ウンベルト・カッスートとゲオルク・ショーレムに、その緒言で謝辞が述べられていた。後者には序言にその類の特別な言葉は見出されず、「I.M.の思い出に」という言がその前にあるだけであるが、この研究の主題と関わる著名な書を物した二研究者、コンラート・ブールダッハとフェードル・シュナイダーの文献が示される。該博な文学史家ブールダッハは「ルネサンス」と「(宗教)改革」概念の起源と原意を問題にしたことで知られ、イタリア中世史家シュナイダーは古典となる『ローマと中世ローマ思想―ルネサンスの精神的諸基盤』を著わした。

今回の早稲田大学「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」の主題「再生」をめぐる発表に際し、アナニーネを紐とき、また久しぶりに『改革理念―教父時代のキリスト教思想と行為へのその影響』(ハーヴァード　1959 年)のゲルハルト・ラートナーの当該書や諸論文に眼を通してみた。主題と内容は別にして、時代的にはアナニーネの後の書はこのラートナーの主著に続き、他方でまたシュナイダーに引き継がれるのであり、非常に興味深い。ラートナーの論文では、最初はアーウィン(エルヴィン)・パノフスキーの記念論集(ニューヨーク 1961 年)に一論文として収載され、後で『中世のイメージと理念―歴史と美術の精選論集』(ローマ　1983 年　全 2 巻)に収録された「植物シンボリズムとルネサンス概念」がやはり今回の問題を考える上で有益であった。ルネサンスは一般的に「再生」の意であるが、ここでは「生長」や「増大」のイメージもあることが指摘されている。

ところで、今回私はアウグスティヌウス隠修士会会長で枢機卿のエジディオ・ダ・ヴィテルボ(1469　1532)を取り上げた。実は、エジディオについては今年度の第 61 回日本西洋史学会(日本大学)大会でのシンポジウム、「中世ヨーロッパ世界にとっての「ローマ」」のなかでも、「教皇座ローマの歴史意識―ルネサンスにおける転換」と題して取り上げていて、彼自身に関わるところではその内容には変わりがない。弁の立つ説教者であり、大航海時代におけるローマ・カトリックの歴史的発展をヨアキム主義とカバラ主義で解釈した神学者であった。先のシンポジウムでは彼の位置付けとイタリアにおける教皇座の役割を、時には今年イタリア建国 150 周年ということもあって、教皇領国家の意義をより長い時間幅で考察した。

これに対し、この度は「リヴァイヴァル―ヨーロッパ文化における再生と革新」という全体題目であったために、冒頭で述べたように、「再生と革新」に関わる先行研究を読みなおし、当日に臨んだ。終了後の議論やその後個人的に受けた質問等から気付いたことは、エジディオには黄金時代到来の時代認識は明確にあるものの、同時代のヒューマニストのような時代の三区分法に繋がる観念とは別の時代区分を想定する必要があるということであった。これは、彼のカバラに由来するセフィロートの影響が大きいためであり、10 という数字が重視される。そして時間の流れの中でキリスト教の発展に盛衰があり、その中で三区分法の要諦、中世暗黒観が見られるとしても、「再生」観念だけでなく「増幅」の観念もまた、ラートナーが言うように「ルネサンス」の意義として注目されてよいのではなかろうか。そのことは、エジディオの「プレニトゥドォ」(plenitudo)の用い方に表われていると言えないだろうか。これは彼の時代意識と無縁ではなく、黄金時代は過去の再現であるだけでなく、前代を転換させて上方に伸長し、「充溢」に至るという意味で黄金時代となり、最後の 10 番目の時代に完成に至る。

イタリア・ルネサンスでは「ギリシア・ローマ」の、所謂古典古代の「再生」だけが「再生」であったのでなく、エトルリア―今回のシンポジウムではいささか言及した―のみならず、またヘブライも、ルネサンスの眼目となったことが、エジディオひとりからも明らかとなる。そしてこれらは広く、ギリシアの彼方にある東方世界とルネサンスの関係を教えるものであり、この点で、ギヨーム・ポステルがエジディオの特異な後継者として現われることになるだろう。当日はポステルを紹介する時間的余裕がなかったが、ここに記しておきたい。